慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	D. Diderot『ロシア政府に対する大学計画案』の構造と問題点
Sub Title	La construction et les problèmes du 'plan d'une université pour le gouvernement de Russie' par D. Diderot
Author	田沼, 光明(Tanuma, Mitsuaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1987
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.27 (1987.) ,p.95- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000027-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

D. Diderot『ロシア政府に対する大学計画案』の構造と問題点

La construction et les problèmes du 'plan d'une université pour le gouvernement de Russie' par D. Diderot

田　沼　光　明
Mitsuaki Tanuma

C'est en 1775 que D. Diderot écrit le 'Plan d'une universlté' pour l'impératrice russe, Catherine II.

Dan cette œuvre, il souligne l'importance d'utilité, qui est le principe essentiel. La base de cette idée est l'utilitarisme de Diderot. Il pense que le bien est l'avantage et le mal est l'inconvénience, et que l'intérêt public est plus important que l'intérêt privé. Le 'Plan d'une université' est écrit pour former l'homme qui peut comprendre l'utilité et agir utilement.

Le 'Plan d'une université' est composé du système utile, et comporte la matière utile. Mais, il manque l'éducation de la volonté de bien et de la belle âme. Dans le 'Plan d'une université', Diderot accorde de l'importance plus à l'ordre sociale qu'au développement de l'homme. Par conséquant, il souligne l'importance d'utilité, mais il ne pense pas à la méthode. A cause du manque de connaissance que le bien est décidé par l'éléve et que l'instruction en est l'aide, cette œuvre a un défaut en tant que la pensée libérale.

第1章 『ロシア政府のための大学計画案』の基本原理と構成

ディドロは1775年，ロシア皇帝エカテリーナ2世に『ロシア政府のための大学計画案』(以下『大学論』と著す）を送っている。この作品はディドロが教育を扱った数少ない著作のうちの主要なものである[1]。この作品は題名からロシア政府のためロシアの教育についてディドロが考察したものと考える向きもあるが，ロシア特有の農奴制への言及がないなど，ロシア一国に対して書かれたものと考えるには不合理な面が多い。むしろ，この作品は当時の社会一般を考察した上でディドロが理想社会実現のため述べた教育論と解した方がよいように思われる[2]。私はこの解釈に則して，この作品を一般的に啓蒙のための教育論として取り上げ，その特質を探究したい。

そこでまず，この『大学論』の基本原理と構成を簡単に述べておきたい。

1）『大学論』の基本原理

『大学論』はどのような人間を形成しようとして書かれたのだろうか，ディドロは言う。「一国民を教育する instruire こと，それはその国民を文明化する civiliser ことである。そこで知識を絶やしてしまうこと。それはその国民を未開な元の状態に戻してしまうことである[3]」「無知は奴隷と野蛮人の宿命である。教育 instruction は人間に尊厳を与える。そして奴隷は間もなく自分が生まれつき奴隷状態に適しているのではないということを感じるだろう[4]」ここに見られるディドロの考え方には，無知な奴隷状態にある国民を教育し，文明人を形成しようとする意図が示されている。さらにそれは理想的な文明社会形成へとつながってゆくのである。「主権者に熱心で忠実な臣下を与えることが問題なのだ。帝国には有益な utile 市民を，社会には教養があり instruit，正直で honnête，愛らしく aimable さえある個人を，家庭にはよき夫，よき父親を，文学界には良い趣味の人々 hommes de grand goût を，宗教には人を感

化し edifiant，啓発的で éclairé，静かな paisible 牧師を与えることが，問題なのである[5]」ここに掲げられたような理想的人間像については後に検討するが，ともあれ，ディドロがこうした文明化された人間を教育により形成しようとしたことは明らかである。この理想的人間の属性は，『大学論』においては，「才能があり美徳的な人間 le génie, les talents et la vertu[6]」とディドロは表現している。そして，美徳的な人間，すなわち，真の善なる人となるためには普通考えられる以上の理性 raison，知識 lumière，能力 force が必要である。又，知識なくして公正 justice ではあり得ず，公正さなくして善なる人間 homme de bien はありえないのである[7]。「公教育の目的はあらゆる時代に同じものである。すなわち，徳ある開明された人間 Des hommes vertueux et éclairés を形成することである[8]」とディドロは教育の目的を明確にする。ここにおいて，ディドロの意図ははっきりわかるであろう。

『大学論』のもう一つの基本的原理は「有益性 utilté」である。この「有益性」なる考え方は様々な形で『大学論』を貫くものである。私は以下の3点において「有益性」を検討してみたい。

1. 有益なシステム
2. 有益な教育内容
3. 有益性とは何か考えられる人材養成

まず，有益な教育システムであるが，これは次のディドロの言葉に収約されていると考えられる。「容易なものから複雑なものへと進む。基本的なものから末端のものへ，最も有用なものからそうでないものへ，すべての人に必要なものからある人にのみ必要なものへ進むこと。時間と疲労を節約すること。教育を年令に釣合わせること，精神の平均的能力における授業[9]」容易なものから複雑なものへ，基本的なものから末端のものへ，年令や平均的能力にあわせた授業といったものは，生徒が理解できるように授業を整えるという配慮である。すべての人に必要なものからある人にのみ必要なものへ進むというのは，万民に有益なものをまずすべての人々に教え，さらにある特定の職業につく人々に必要な知識をそうした人々にのみ教えようとするものである。すべての人々に必要なものを優先するのは「公教育の目的は，それがいかなる領域にせよ，学識深い人間を作ることではなく，それを無視することが人間にとってあらゆる生活状態の中で有害であり，いくつかの社会では多かれ少なかれ不名誉であるような多くの知識を教えることである[10]」からである。こうした考えから，ディドロは知識を本質的知識」と「便宜的知識」connaissance essentielles et connaissance de convenance[11]に分ける。前者は，あらゆる職業に必要な知識であり，万民が学ぶべきものである。後者は特定の職業に必要な専門的知識であり，その職業に就く者のみが学ぶべきものである。大学のシステムは，低学年においてすべての人々に有益な本質的知識を教え，学年が進むにつれて特定の人々にのみ有益な便宜的知識を教えるようになっている。そして，必要がなくなった段階で学生は大学を去ってゆく，「すべての者が最後までついてゆけるわけでもないし，ついてゆくよう定められているわけでもない[12]」上の段階にゆけばゆく程学生数は減ってゆく。「教育の有益性は聴講者の数が減るに応じて減ってゆく[13]」

次の有益な内容であるが，これは後に示す大学のカリキュラムをみると明らかな通り，古典語や宗教的な内容の科目をできるだけ押え，代数・幾何・物理学・化学・論理学といった実用的な科目が増えているということである。ディドロは大学を国家の管轄下に置くなど教育を宗教から引き離し世俗化していく方策をとっているが，この実用的な科目の大幅な取り入れもこの世俗化路線の一つと考えられる。尚，宗教や古典に関する科目も入っているが，これとても有益性があるとみなされる限りにおいて取り入れられている。宗教や古典の教養が人間生活の模範を示し，良い趣味を教え，秩序ある社会のため役立つ限りにおいてこれらの科目は取り入れられるのである。従って，これは前にも述べたが，古典を読むといっても年令にあわせて理解できるものを読んでいくのであり，意味もわからないものをただ暗唱するといった方法はとられていない。

3番目に有益性とは何か考えられる人材の養成ということを掲げたが，これは直接ディドロの言葉から出てきてはいない。しかし，どんなものが有益かを人々が考え，理解できるようになることは，有益性を原理とした秩序ある社会の健設にとって必要不可欠と考えられる。（後述するが，ディドロは善を利益としている）いくら有益なものがあっても，人々にそれが有益であるとわからなければ何にもならないからである。そこで有益性とは何か理解できる人間の養成のための教育が考えられているはずである。私はこの科目として，自然史と論理・批評が当てられていると考える。自然史について，ディドロは述べる。「生徒たちが自分たちの感覚 sens を使うことを学ぶのは自然史の研究においてであるが，その感覚を使うことは，それなしでは生徒たちは多くのものを知らなかったり，もっと悪いことには他の多くのものを

知りそこなったりしてしまう技術であり，我々の認める唯一の方法をうまく採用する技術であり，あらゆる教育の前提となるすぐれた基本的原理がそこから作り出されてくる技術なのである[14]」自然史を学ぶことにより，どんなものがどのように有益なのか識別する能力が身につくと考えられる。論理は「公正に考える penser juste，又は感覚や理性の合法的使用をなす技術である。すなわち，受け取った知識の真実性を確保し，真実の探究の中で精神をうまく導き，無知からの誤りや欲得・感情からの詭弁を解く技術であり，それなしでは，あらゆる知識は多分人間に役立つよりは有害であり，人間はそのため，馬鹿で愚かで邪まなものになる[15]」批評は「我々の知識が基くところの，しばしば矛盾しあっている権威を評価する技術である[16]」論理や批評により身につく合理的な判断力により有益なるものも判断できるようになる。

2）『大学論』の構成

次に『大学論』のカリキュラムを図示しておく。

大学教育の一般的計画

第1学部，学芸学部 Faculté des arts		
第1課程	第2課程	第3課程
第1クラス 算数・代数・確率・幾何 第2クラス 動きの法則，物体の落下，遠心力と引力，力学，水力学 第3クラス 天球と地球，世界のシステム，食の計算，天体の動き，天文学，日時計製作法， 第4クラス 自然史，実験物理学， 第5クラス 化学，解剖学 第6クラス 論理，批評，合理的一般文法 第7クラス ロシア語文法，ロシア語，スラブ語 第8クラス ギリシャ語，ラテン語，雄弁術，詩	最初の課程と平行しそれに続く， 第1クラス 形而上学の第1原理，2つの実体の区別，神の存在，魂の不死，来たるべき刑罰，普遍道徳，自然宗教，啓示宗教 第2クラス 歴史，神話学，地理学年代学	第1クラス 透視画，デッサン
第2学部 医学部	第3学部 法学部	第4学部 神学部

17)

第2章　ディドロの理想的人間像

本章では前章の1)において述べた『大学論』における理想的人間像について他の著作を参照しながら考察してみたい。『大学論』において養成さるべき人間は，忠実な臣下，有益な市民，教養があり，正直で，愛らしくある個人，よき夫，よき父，良い趣味の人々，人を感化し，啓発的で，静かな牧師といった形で表現され，より一般化した形では「才能があり美徳的な人間」と表現されている。そして，そのためには「理性，知識，能力が必要である」こうした理想的人間像はディドロのいかなる考えから導き出されたものであろうか。又，こうした像はさらに詳細に調べてみるとどのような特徴をもつものか，以下に述べてみたい。

1）ディドロの民衆 peupl 像と群衆 multitude 像

まず，ディドロの民衆像と群衆像を取り上げる。その理由は，ディドロが教育し理想的人間にしなければならないと考えたのは当時の民衆や群衆であり，その性格は検討しておかねばならないと考えるからである[18]。

ディドロは『クラウディスとネロの統治について』で次のように述べる。「民衆はあらゆる人間の中で最も愚か sot で邪悪 méchant である。民衆から遠ざかることと，よい人間になることは同じである[19]」

百科全書の『群衆 multitude』という項目では群衆の性格は次のように描かれている。群衆の判断は悪意があり méchanceté，馬鹿げており sottise，非道で inhumanité，理性なく déraison，偏見に満ちている préjugé。従って，知性 connaissance や上品な趣味 goût exquis を要するものに関しては，彼らの判断は用心すべきである。群衆は無知で ignorant，ぼんやりしている hébétée。彼らは良識ある少数の人々に手本を示してもらわなければ，理性ある判断ができない。道徳的なことやすぐれた寛大な行為 actions fortes et généreuses はできず，ヒロイスムは彼らにとって狂気の沙汰にしかならない。情感の細やかさ délicatesse des sentiments は万民にあるはずだが，彼らにはあるように思われない[20]。

百科全書の『民衆の機嫌をとる者 populaire』という項目で，ディドロは，民衆に近付き手なずけようとする者には何か政治上のもくろみがあるから注意せよと述べる[21]。これは民衆の扇動されやすい性格が，政治的に利用される危険をもつことを指摘したものである。理性によって物事を自分で判断することができず，自律できない民衆をディドロは批判し，それが政治的な危険を引き

起こすことを述べている。

2) ディドロの理想的人間像

本項では前にも述べた通り，ディドロが『大学論』で描いた理想的人間像を彼の他の著作も参照しながら調べてみることとする。その際，他の著作に書かれていて『大学論』に書かれていない理想的人間像の要素もあわせて検討したい。

A 理性

ディドロが理性を重視する態度は様々な著作にみられるが，『基本的原理入門』の「改宗者」は，批判的精神をもち，真理を追求し，合理的に証明されたもののみを信用するという態度を貫いている[22]。そして「偽わりの宗教のすべてを流行させた原因は，人々が他の証拠をさしおいて，歴史的証拠に与えた優先権なのです。人間の証言が，理性の証言に優越すべきことが，ひとたび容認されるや，すべての不条理に対して扇が開かれてしまったのです。その結果，いたる所で，権威が，もっとも明白な原則にとって代わり，全宇宙を虚偽の学校にしてしまったのです[23]」と語る。さらにここでは，物理的証拠と数学的証拠がまず第一に重視される。

ここにおいて，理性は不条理や（不合理な）権威を否定し，真理を追求していくという働きをもつ。つまり，合理的に考えていくのである。この理性の働きにより，宗教や政治などの不合理な権威の言いなりにならず，自ら考え，自らの思慮深い合理的な判断によって生きることをディドロは人間の条件として掲げるのである。

『エルベティウス「人間論」反駁』においては啓蒙専制君主が次の様に批判される。啓蒙専制君主は，「国民から，考える権利，欲したり欲しなかったりする権利，さらには君主がよいことを命じる時にもその意志にさからう権利を奪ってしまう。しかし，この反対する権利というのはどんな馬鹿げたものであっても，やはり神聖なものだ。それがなければ臣民は，いい草のある牧場へつれていってやるからといって自分の苦情を全然聞いてもらえない羊の群れのようになってしまう[24]」

この考える権利を忘れることは「全くの奴隷状態」を意味するのであり，ディドロは一人一人が理性的に考えることができることを基本的な人間の権利と考えているのである。「臣民」「市民」といわれる者が，ひたすら君主の命令や社会の慣習に迎合する者として考えられていないことは明白であろう。そうした命令や慣習をまず理性的に考え吟味することが必要なのである。

では，この理性は何を捉えていくのであろうか。この問題について B.において徳との関わりにおいてディドロの思想を明確にしてゆきたい。

B 美徳

ディドロは善や徳についてどのように考えていたのであろうか，まず，善の概念を明らかにしたい。ディドロは『哲学者とある元帥夫人との対話』で「善 bien とは利益 avantage であり，悪 mal とは不都合 inconvenient である[25]」と語る。また『真価と美徳に関するエッセイ』では「一般に，あらゆる愛情 affection が，種族の利益と一致している時，その自然の気質は完全に善である。反対に，有益な愛情 affection avantageuse を欠き，そこから得るものが余分であったり足りなかったり，その主要な目的に有害であったり反したりするならば，その気質は邪魔なものであり，結果としてその生物は悪である[26]」と述べている。

ここにディドロの功利主義的な善悪の定義が現われている。善とは利益であり，しかも，それが私益 intérêt privé にとどまらず，その種族全体の利益，すなわち公益 intérêt public と一致しなければならない。利益への感情が激しくなりすぎて，「我々が一般的行為を行なうのを不可能にしてしまうような生活へ近付くならば，それは悪いものとなる[27]」

この有益なるものや利益をもって善と考える思想こそ，『大学論』において中心の原理に置かれているものである。

さらに，徳とは善を行なうことであると考えれば，美徳的な行為とは，公益，すなわち万人にとって有益なことを行なうということになる。そして，そのような行為を行なえるような人間を形成すべく『大学論』は考えられているのである。

ここでの理性の役割は，善なるもの，すなわち，公益，有益性を捉えることである。自然体系の利益が人間を動かす感情の目的となる時，その人は善人となり，不利益がその目的となる時，その人は悪人となる[28]のであるから，理性により体系において有益なものが何か捉えていく必要がある。「愛情が健全であり，又，その愛情の目標が社会にとって有益であり，常に合理的なものの追求に適っているならば……行為における公正・衡平 droiture, équité と呼ばれるものが形成されるであろう[29]」

C 知識

ディドロは知識を重視しているが，この知識とは『大学論』において有益な知識であることは，第1章で述べたとうりである。『フォルバック夫人への書簡』で，ディドロは，自分に関係する状況以外についての知識は無

視することも可能だが，自分に関係する状況の知識は充分知らねばならない[30]という考えを明らかにする。その獲得された知識によって精神を啓発するのである[31]。

D 能力 force

ディドロの能力についての考え方は，『エルベティウス「人間論」反駁』において，エルベティウスの環境決定論を否定して素質的要因を重視した点にその特徴がある[32]。『大学論』においても，才能に応じて受ける教育が異なる構造となっている。これも社会的な有益性により考えられたシステムといえよう。

E 善意志・美しき魂 la belle âme

この部分は，美徳の一部と考えられるが，『大学論』においてあまり鮮明に出てこない部分なのである。換言すれば，善意志や美しき魂を形成するためのカリキュラムなのものが『大学論』からは明確にはイメージできないように思われる。が，これらはディドロの他の著作においては，その重要性が強調されているのである。

ディドロは『真価と美徳に関するエッセイ』において，利益（さらには公益）を善とした不利益を悪としたことは前に述べたが，さらに，「利己主義的な考えのみから行動する限りにおいてあなたは邪悪であろう[33]」という。利己心から行なった行為がたまたま公益と一致しただけでは，それは善とはみなされない。「あなたが，愛情から，心から，善をなした時にのみ，あなたは善良ということになるだろう[34]」また，この著作からは，強制，報酬，罰への恐れからなした行為を善良とはみなさないとする考え方が読みとれる。「人が社会の手に入れさせたいくつかの利益の動機のみが真価を形成する[35]」「もし，偶然，あらゆる愛情を除外して，来たるべき報酬への希望が（神への）忍従の唯一の動機であるなら，そうした考えが，その被造物において，自由で無私無欲のあらゆる感覚を除外するとしたら，それは真価も美徳も示さない全くの取引である[36]」

ここに掲げられている内容は，善意志といってもよいと思われる。ともかく，ディドロの美徳についての考え方は明確である。公益に適った行動をとるのは当然として，それだけで美徳的とか善良とか言うことはできない。善をなそうとする心をもってそれをなさねばならないのである。ここには，有益性や公益といった功利主義的なものとは別の道徳的情操というべきものが入ってきている。が，『大学論』においてこの部分はあまり取り上げられていないのである。

『フォルバック夫人への書簡』でディドロは「すぐれた才能をもった者より美しい魂をもった者を愛する」と言い，さらに，子供が善良であることが望まれ，そのために正義 juitice と強い魂と，正しい博識な精神 esprit droit établairé, étendu が必要とされる[37]。正義とは，公益の追求から出てくる衡平と考えられるが，これを追求せんとする心こそ美しい魂と考えられる。

『ネロとクラウディスの統治について』でディドロはセネカを弁護し，セネカの罪を厳密に論証することよりも，セネカがいかに美しき魂をもっていたかに主眼を置く。ここでディドロはすぐれた知性よりも美しい魂という心情的なものの立場に立つのである[38]。

こうした，善意志や美しい魂といったものは，ディドロの考える美徳の構成要素として当然入ってくるものである。が，『大学論』においてこうしたものの教育はあまり積極的に語られていない。こうした問題点を章を改めて考察したい。

第3章 『大学論』におけるディドロの教育思想の問題点

前章までは，ディドロの『大学論』の特質と，ディドロが来たるべき理想社会に生きる人間をどのように考えているか考察してきた。ディドロの考える理想的人間像とは要約していうと次のようになる。すなわち，善意志美しい魂をもって，善（公益）とは何かを理性により考え，それに適う知識を得，それに達う能力を用いてそれを行なう人間である。この理想的人間を形成するため『大学論』は考えられているのであるが，ここには種々の問題がある。以下それを考察する。

1） 善意志・美しい魂といった情的意志的部分の後退

ディドロは，情念のゆきすぎを厳しく批判している。情念が自己愛にのみ傾きすぎると意地悪になるし，他人への好意にのみ傾きすぎると無分別な程寛大となる。これに正しい関係を樹立するように情念を導く理性が必要であり，その理性を発達させる教育が重要となる[39]。他方，ディドロは情念が人間の諸行為の発条であり，これなしに偉大な行為はなし得ないと述べている[40]。この理性と情念におけるディドロの見解は，情念の重要性を認めながらも理性重視に傾いている。『大学論』においても，理性の訓練・それによる善（公益）の理解が重んじられている。

ディドロの善良さの概念も二つの内容があることを前に述べた。すなわち，善＝公益を行なうことと，善意志をもってその行為をなすことである。善＝公益の方は『大学論』において，その大部分を占める有益なカリキュラムによって摂取されているが，善意志の方はどう

か。『大学論』において善意志を形成する教育とはどう考えられているだろうか。

『基本的原理入門』でディドロは次のように述べる。「幸福に至る道は，徳を実践する道そのものだ。運命は，徳に対して様々の障害をおくこともあるだろう。だが，運命といえども，徳に常についてまわるあのうっとりとするような法悦感，あの清らかな感能の喜びを，それから取り除くことはできないだろう。徳の持ち主に対して，世間の人々と運命とが一緒になって悪事をたくらんでいる間も，この徳ある人の方は，自分が耐え忍んでいる事柄すべての埋め合せを，ありあまるほど心の中に見出しているのである。これこそ本当の幸福と本当の不幸の源である。これこそ，迫害と恥辱に取り囲まれていても，善人対しては幸福を生み出すものであり，幸運の恵みのただ中にあっても，悪人に対しては苦悩を生み出すものなのだ」すなわち，人間は善をなしている時，喜びや幸福を味わうというのである[41]。

この内容と関連するのは『大学論』の宗教道徳の課程である。ここでは真の幸福を科学的に検討することと共に，魂の不死，来世の確実性が主題として取り上げられる。この後者の部分は，善をあくまで追求したソクラテスやセネカの態度と深く関わりあい，善意志や美しい魂の問題にも触れることになると思われる[42]。そして，「この課は，結局，悪徳の不都合，さらには悪徳の利益をも，美徳の利益と比較すると，この世界で幸福になるためなすべき最良のことは善良な人間となることでしかないという正確な証明で終わる[43]」ここには，善をなすことの喜びや善意志の尊さの主張があるように思われるが，ここでも問題となるのは利益であり，『大学論』全体の主張構造を考えれば，公益・有益性への関心は大きく，善意志・美しい魂といった人間精神の内部に関わることへの関心は少なくなっている。

2）ディドロの教育観と『大学論』におけるディドロの関心

これまで『大学論』の特質とディドロの理想的人間像を比較しながら，『大学論』では合理性，有益性が強調され，人間の善意志や美しい魂といった部分が後退していることを述べてきた。さらに，人間の内部構造や，それへの働きかけ方といった教育方法上のモデルに関わることも『大学論』には出てこない。これはなぜか。私は，ここにディドロの，社会秩序の維持という政治的・社会改革的関心の先行があるように思われる。それに対して，人間の成長・発達に第一の重みづけをなして，どう形成していかということへの関心は薄れてしまっているのである。

このことに関連して，ディドロの教育観をみてみることとする。『エルベティウス「人間論」反駁』において彼は，人間は善にも悪にも傾く性質をもって生まれてくるものであり，その悪への傾向を押え，善への傾向を助長するところに道徳や教育の目的・任務がある[44]という考えを明らかにしている。この教育観から視ると，善とか悪は子供が決めるのではなく，どこか外側で決められている。そして善の芽は伸ばし悪の芽はつみとるというわけである。今までの探究から善とは公益ということになる。ではこの公益という善はどこから出てきたものか。

ディドロは百科全書の項目『自然法』において，一般のかつ共通の利益と一致するものを善と考え，それを一般意志に尋ねて決めるべきものとしている[45]。この一般意志とは，自然の体系に基き，社会の秩序を守るべきことを人々に命ずるものと考えれば，この善は社会秩序の維持やそのための政治への関心によって決められていることになる。このように，政治的・社会的秩序への関心から公益という善を決め，それを人々に教えてゆくという形態で『大学論』という教育論は出てきている。そこでは，学生がそうした善を考え吟味しながら成長していくプロセスや，そこにどういう働きかけをして形成を行なうかということにはあまり関心は払われない。ディドロの関心は，まず第一に，公益を行なえる有益な人間の生産なのである。ここでは理性も公益という善を受動的に把握することに使われる。理性が新たな善を作り出してゆくことはない[46]。

この政治的・社会改革的関心の先行から生じてくるものは何かといえば，ある徳目・ある理想的な人間像にばかり関心がゆき，その部分の吟味は精緻となってくるが，そこに至る形成プロセスにはあまり関心が払われなくなってくる。

さらに一歩進んで，徳目（ここでは様々な有益性）や理想的人間像（ここでは有益な人間）自体を吟味し，それを自ら善いと判断し，（場合によっては吟味の結果，有益性を悪いと判断することもありうる）成長していくという生徒のイメーヂはここからはあまり出てこない。この生徒のイメーヂは，何が善いかを自ら判断し，自ら善を作り上げていくという人間像，さらには，そうした判断をなす人間の内部構造や吟味のプロセスといったものに目を向けた時，始めて出てくると思われるが，『大学論』にはそのような関心が払われていない。この点において，『大学論』は善の伝達的側面に重み付けがかか

っており，善の生産的側面にあまり重きがおかれていない。政治的・社会的秩序の体系が先に作られており，その必要としての善＝有益性を身につける人間を教育によって作り上げようとするのである。しかし，教育によって成長する人間が，やがて善い社会を形成していく（ここではまだ善い社会がどんなものか不明である）といった発想はディドロの思想には出てこない。

ピーター・ゲイは，民衆の潜在力を認識することが自由主義理論の先行条件であったにもかかわらず，啓蒙思想家たちはこの理解をやめてしまい，このり誤りが彼らの政治思想の根本的な弱点となり，批判の的となった。と啓蒙思想家の教育について述べている[47]。私の今回のディドロについての考察によれば，人間の成長とか善を生産する力といったことへの関心の欠如が，逆に政治的にも弱点をもってしまったということになるであろう。自律とか自由は，社会において善と考えられたものを子供に教え，身につけさせるというやり方では実現され得ない。子供は自ら何が善いかを探究しそれを実現していくという人間観にたち，あくまで善さの決定は子供に任ねるという前提の元に，その成長・発達を援助するという教育方法をもって始めて，自由や自律は成しとげられると思われる。ディドロは，確かに教育を重んじてはいるが，それが教育そのものへの関心というよりは，秩序といった社会的・政治的関心への引きづられ，社会的に善と決められたものの教え込みとして教育をとらえ，子供の善くなろうとする力を忘れてしまったといえよう。

第2章で考察した如く，ディドロは理性や自ら考え判断する力を重視する。しかし，『大学論』と『真価と美徳に関するエッセイ』をみると，善は自然の体系から導き出された公益と決められており，理性の役割はそれをとらえることに収約される。理性の生産的能力は小さいものになってしまっている。善を決めてしまったがゆえに，理性の役割も小さくなってしまったことも，自由という観点からみれば大きな後退であろう。

註

1) 井上坦『D. Diderot の教育思想—教育目的としての徳と知の関係を中心にして』(大社紀要，1966.7) で『児童の教育に関する書簡』『ロシアについての学習についての試論』『ロシア政府のための大学プラン』の3つがディドロの教育的著作として掲げられている。
2) 吉谷武志『D. Diderot の教育思想における近代性の再検討』(九州大学教育学部紀・要教育学部門 第31集別冊　1986, 3 p. 24)
3) œuvres complètes de Diderot etablis par J. Assézat (Libraire Garnier Frères, paris, 1875) 3巻 Plan d'une université p. 429. (以後AT. 3と略す)。
4) Ibid p. 429
5) Ibid p. 431
6) Ibid p. 433
7) Ibid p. 433
8) Ibid p. 439
9) Ibid p. 439
10) Ibid p. 444
11) Ibid p. 434
12) Ibid p. 442
13) Ibid p. 442
14) Ibid p. 461
15) Ibid p. 464
16) Ibid p. 465
17) Ibid p. 451
18) ここにおいて民衆と共に群衆についても扱う。この群衆の性格はディドロの批判するところのものであり，教育の必要性を考えさせるものである。
　尚，Roland mortier 'Diderot et La notion de «peuple»' (Europe January-Febluary 1968) において勤労階級 peuple-classe laborieuse と異なる peuple-multitude, peuple-masse がディドロの民衆 peuple 像として掲げられている。
19) AT. 3 Essai sur les règnes de Claude et Néron. p. 363-364
20) AT. 16 p. 137
21) AT. 16 p. 383
22) AT. 2 Introduction aux grands principes p. 80-81
23) AT. 2 Ibid p. 81 ここでいう「歴史的証拠」とは神のおつげのようなものであり，迷信的なものである。歴史学的な史料批判を伴った証拠ということではない。
24) AT. 2 Refutation de l'ouverage d'Helvétius intituré L'Homme p. 381
25) AT. 2 Entretien d'un phirosophe avec la Maréchale de*** p. 512
26) AT. 1 Essai sur le merit et la vertu p. 30
27) Ibid p. 30
28) Ibid p. 29
29) Ibid p. 36
30) AT. 3 Lettre à Madame La comtesse de Forbach sur l'éducation des enfants p. 542
31) Ibid p. 543
32) 吉谷武志，前掲論文。
33) AT. 1 p. 30
34) Ibid p. 30
35) Ibid p. 30
36) Ibid p. 53
37) AT. 3 p. 540-541 (岩波書店 1980)
38) 中川久定『ディドロの「セネカ論」』 p. 79
39) AT. 7 La père de Famile p. 181
40) AT. 1 Pensées philosophiques p. 127

41) AT. 2 p. 88
42) 中川久定，前掲書。
43) AT. 3 p. 491
44) AT. 2 p. 440-441
45) AT. 14 Droit naturel p. 297
46) これ以後の「善さ」をめぐっての議論は，村井実『教育学入門』『教育思想(放送大学印刷教材)』を元にしている。特に，善さを決めるのが生徒自身なのか，外側の何か（国家・社会・大人等）なのかで教育のタイプが異ってくることに注目している。
47) peter Gay 'The Enlightenment: An InterpretationII. The Science of freedom' (New York 1978) p. 517-522

尚，ディドロの著作の中で翻訳されているものは，法政大学出版局・ディドロ著作集(1巻.1976, 2巻.1980)を参照した。